

小野は急いで門内へ入ると、果して先生の死目に間に合つたかどうかと、胸をわく／＼させて毎日の支關口の方へ赴かうとした。と、その勝手口の方へ廻る垣の切れ目に「御見舞の方はどうぞ此方へ」として紙片に指を書いて示してあつたので、さてはまだ大丈夫なのだと思ひながら、その指示のままにお宅の勝手へ入つて行つた。見ると、その茶の間に、先生の知友らしい人々や、主だつた弟子たちが澤山集まつてゐる様子だつた。それに依つて、小野は更に物と間に合つた安心を覺えながら、勝手知らないのて遠巡して、その縁側へ進み寄つた。何だか彼は自分などが、かう云ふ際に先生の死目に會ひに来る、資格なんぞないやうな卑下を覺えながら……

その座敷の中には、先生と同輩の親友で、小野たちがこの間まで教へを受けてゐた大學教授の小菅氏や、高等學校の先生の倉橋氏、林氏、數藤氏などの顔も見えた。その上見知らぬ童顔の、長者らしい風格の人や、鹿爪らしい髯を生やした學者らしい人などが、眞ん中に切つてある爐を圍んで、黙々と坐り合つてゐた。そしてそれらの人々に交つて、大概小野に取つては先輩の弟子たちが、ひそ／＼と心配の囁きを交しながら、何かと立働いてゐる様子だつた。小野はその漠然とした壓迫の中に、縁側に立つて誰にともなく、頭を下げて挨拶した。

「あゝ、小野君か。——此方へ來給へ。」

と、やうやく向うの座敷の隅にゐた一團の中から、先刻電話で知らして呉れた黒田が、立つて聲をかけて呉れた。小野はやつと許しを得た思ひで、縁側から上ると、それらの先生たちの後を通つて、恐る／＼その方へ行つた。その、算符を置いてある間の隅には、弟子たちの中でも、割合に若い人たちが、先輩の中でも一番氣の安い、米田氏などと一緒に集まつて話をしてゐた。

「一體、御容態はどうなんだい。」

小野は固くなつて、そこにきちんと坐り込みながらも、まづ第一にさう聞かざるを得なかつた。と、黒田が毎もの甲高い調子をさすがに低めて、併しながら雄辯に語り出した。

「うむ。まだ大丈夫なんだ。が、先刻はもう駄目だといふんで、皆が告別に病室へ入つたんだがね。最後に、殆ど絶望的に、念のためにやつたカンフル注射が効いてねえ、今朝からもう何度やつても反應がなかつたのに、それをやると先生は急に頭を動かし出したんだ。それでやつと又一縷の望みを得て、僕たちは病室から出て來たんだが、僕は何かもう大丈夫だと思ふんだ。あれで奇蹟的に先生は癒りさうな氣がするよ。現に前にも修善寺で胃潰瘍を起した時も、やつぱり内出血で危篤に陥りながら、廻つた例もあるんだからねえ。今度も必ず奇蹟的な力が起つて、恢復するに違ひない。この際奇蹟の起ることは決して不自然でない氣がするよ。是は何も僕が、先生に對する愛惜の念からさう氣休めに思ふんでなくて、是迄に科學的なカンフルの本が、思懸けなく急に効いたといふ最後の所まで來た時、殆ど諦めのためにやつた絶望的なカンフルの本が、思懸けなく急に効いたといふのは殆ど人力を盡し切つた後に、天の力が働きかけたとも見られるからねえ、もう醫術の上では、凡ゆる方法を講じて了つて、もう後は自然の治癒を待つしかないと云ふ時に、それが現はれさうになつて來たんだからねえ。どうしても僕は先生は助かると思ふよ。先刻から僕の直覺がさう感じてゐる。きつと癒るよ。」

黒田は肩を上げ、口の端を力を入れるやうに歪ませて、吾と吾が信念に燃えながら、さう小野に説明して聞かせた。彼はさう言ふことに依つて、何よりも己を信じさせ、そしてその信熱で自分を安心させたかつたのだ、その上、彼のその熱した語調は、周囲を信じさせるに十分だつた。

「僕も何だか先刻から、さういふやうな気がしてゐた。何しろ修善寺のことがあるんだからなあ。」
米田氏も云ひ出した。氏は前にその場に立會つてゐただけ、今度も亦それだけで終るに違ひないと信じてゐるらしかつた。

黒田はなほも説明が足りぬよりか、自分の信念を何處迄も宣傳するやうに云ひ續けた。

「眞島さん（主治醫の名）に聞いた所によると、何しろ先生の身體ほど粘り強い生命力を持つてゐるものは、珍らしいんださうだからねえ。普通人だと死期の脈搏が大抵百二十だといふんだけれど、先生のはもう百三十を越しても、まだ持ち續けてゐるさうだし、又一體人が死期に際しては、脈搏がどんどん上つて行くのに反して、體温がぐんぐん下つて行くんで、その表が丁度上ると下るとで、十字形に交叉するため、それを「死の十字」といふんださうだが、先生のはとうにそれを越えて、まだ生命を保つてゐるんだからねえ。その赤と黒との線を先刻溫度表で見ただが、實に凄いやうな気がしたよ。それに先生は飽く迄意識鮮明ときてゐるんだらう。先刻もその最後のカンフルで、やうやく昏睡から覺めると、すぐ何か食ひたいと仰しやつて、一匙赤酒を飲ませて上げたら「甘い」と云はれたさうだからねえ。そしてその間にも、眞島さんに、今死にたくないといふと洩らされたさうだからねえ。——先生もあゝしてやうやく自分の藝術觀を確定されて、それに「明暗」が未完成の儘では、現世に未練があるといふよりは、藝術上の最高要求で、死なうたつて死に切れないだらう。——兎に角さういふ話で、先生の心臓と頭腦だけは、何處迄丈夫に出来てゐるんだか、解らないんださうだ

から、さういふ粘り強さで、この悪い絶頂まで持ち堪へて来た以上、この上悪くなりつこはないよ。是からはきつと下り坂で、自然と順潮になつて行くよ。……」

黒田はなほもその信念を、強調してやまなかつた。

「さうだね。僕も御病氣と聞いた初めから、決して先生は死にやしないと信じてゐた。」
小野も始めて口を挿んだ。

「大丈夫とも。死んで了ふ人なら、かう危篤状態が永びいてゐはしないよ。」
米田氏も、平明な言葉で、黒田の言葉を要言するやうに云つた。

座にゐる皆は、うつそりと黙つてゐる畫家の須山氏も、小野より少し遅れて来た大學生の原口も、又その近邊にゐた先輩や知人たちも、みんな希望を持ちたいと思つてゐたので、この黒田の確信は、殆ど誰も心に深く食入つて、疑ふ餘地のない事實のやうになつて了つた。

信し易い、人の影響を受け易い小野も、勿論さう信じた。そして心から、先生の蘇生を念じてゐた。が、併し先生を死なしたくない熱望に燃えてゐながら、彼の心の何處かには、先生の死を庶ふやうな一種の欲望があるのを、意識せざるを得なかつた。彼は今先生に死なれるのは慈父を失ふより悲しかつた。あの何となく嚴肅でありながら、しかもすつかり包まれて了ひたいやうな溫容に二度と會へなくなるといふことは、折角先生に親しみを感じ出し、先生の幾らか特別な愛護を受け始めた彼に取つて、何より悲しむべき事に違ひなかつた。けれども亦それと同時に、こゝで先生の死といふ、一つの大きな出来事に會ふことは、何となく彼自身の人生を劃す、一大盛儀であるやうな気がした。そして今自分がその文藝史上にも特記さるべき、先生の死に際會して、一人の登場人物であり得るといふことは、何となく一種の虚榮心を喚ぶのだつた。——それは必ずしも先生の死を、庶ふ譯ではなかつ

たが、さういふ氣持が少しでも自分の心内にあることを意識すると、彼は堪らなく自らを卑しんだ。そして先生の蘇生を、信じて止まぬ黒田の熱した信念に對して、心から自分を恥しく感じて、暫らく黙り込んだまゝ、下を向いて坐つてゐた。

その後の、診療に従事してゐた醫師たちが、病室である先生の書齋の方から、靜かに引上げて來た。主治醫師の眞島氏といふのは、大學病院でも有名な人だが、もと先生が四國の松山中學教師をしてゐたとき、教へ子の一人だつたといふので、その後先生が糖尿を病んでからの、熱心なる主治醫だつた。その醫師は自分の師であり、且つ掛け替へのない吾が國の文豪の、生命を握つてゐる心痛のために、廣い額を蒼ざめさせ、近眼鏡の奥の眼をしばくと瞬いて、少し前屈みの上半身を窄めながら、茶の間の前の廊下へ現はれた。つゞいて半白な硬い髪と嚴肅さうな整つた顔と、少しも物に動じないやうな冷徹な近眼を光らした巽氏や、小柄だけれどもゆつたりと肥つた、圓満さうな堂本氏らの、相談のために聘せられた有名な専門醫たちが、相並んで出て來た。その後には更に、近所の信頼すべき開業醫で、眞島氏を助けて診療に従事してゐた矢部氏や、眞島氏が連れて來た自分の助手などが、病室床録や體溫表やノートを拂へて、ぞろ／＼と此方へやつて來た。醫師たちはカンフルの反應があつた後の、先生の状態をすつかり診察して、その取るべき手段を打合せするため、茶の間の次なる控室へ集まつて相談する所らしかつた。

その主治醫師の眞島氏の姿を見ると、先刻からまだ一人で、先生の恢復を主張してやまなかつた黒田は、早速初めからよい返事を促すやうな口調で問うた。

「どうです、希望を持つてもいゝんでせう。」

「いや、もう偶然を待つばかりです。」

と、併し眞島氏は、沈んだ聲で答へたまゝ、廊下を通り過ぎて控室の方へ行つて了つた。併し皆なは、眞島氏のその言葉を聞いても、それは醫師として盡すべきことをつくした人が、謙遜の自白でもあるやうに、決して絶望はしなかつた。その所謂「偶然」がきつと現はれるに違ひないと。

「なに大丈夫だよ。きつと。」黒田はなほも云つた。「まだあゝして醫師たちが相談に引上げてくる位だから兎に角まだ大丈夫なんだよ。この小康を得たまゝで、きつと癒るよ。」

そこへ醫師たちの後から、鳥渡間を置いて、先生の夫人が姿を現はした。

小野はそれ迄、巽子夫人に會つたことはなかつた。書齋で先生にお目にかゝる以外には、その時家での方とは少しも交渉のなかつた彼は、たゞ先生の小説に、色々な形に代へられて、夫人の姿が表現されてゐるのを、想像によつて描いてゐただけで、實際の夫人を見たのは、それが初めてだつた。

夫人は思ひの外に肥つた、背の割合に低い方だつた。併し、引つめた束髪に結つて、黒い紋付の羽織を着てゐるのが、よく身體と調和が取れて、屢々見受けるある貴婦人型の、女丈夫といふやうな感じを、一と目で小野に起させた。殊にその眼は、一重瞼がはつきり切れて、幾らか強い凝視的な貫のものだつたので、何となく初対面の小野にも、意力の強い人のやうに、少し怖く思はれた。が、決して感じは、悪い人ではなかつた。馴れ難いが、馴れれば手頼りになる女。さういふ感じが、その時から既に小野にも起きたのだつた。

夫人は部屋の内へ入つて來て、坐りながらあたりの人々を見廻して訊ねた。

「大寺さんは？」

大寺といふのは弟子たちの中で、先輩では割りに年若い方ではあるが、一番親しく先生の家へ出入

かうなんて。」

黒田も憤慨するやうに云つた。

併し夫人は肯はなかつた。

「でも、私も撮つて置きたいんですよ。記念のためにね。」

さういふ夫人の頬には、淋しい絶望的な、作りつけたやうな微笑があつた。その夫人の諦めたやうな、強い餘裕のあるやうな態度には、みんな厭されたやうに、暫らく黙つた。

そこへ隣の間から、話を聞傳へたと見えて、大寺氏が入つて來た。

「ねえ大寺さん。どうかして今の中に、私寫眞を撮つて置きたいと思ふんだけれど。」

夫人の言葉は飽く迄、自分の考へを實行したいといふ、強い響を持つてゐた。

「さうですね。」大寺氏も鳥渡考へたが、すぐ又止めるやうに云つた。
「でも奥さん、今そんなにまでして、寫眞なんぞ撮つて置かなくなつて大丈夫ですよ。もつとよくなつてから、ゆつくり撮つた方がいゝぢやありませんか。」

「快くなつてもならなくつても、何だか私記念に撮つて置きたいんですよ。」

夫人はなほも氣強に主張した。

小野はその夫人の主張を、初めは一種の悪い衝撃の感じを以て聞いてゐた。が、あゝまで云はれるからには、何か思ふ仔細があるに違ひないと思つた。そしてこの際弟子たちの、感傷的な反對を押してまで記念のために撮らうといふ、冷静な諦視の態度に、一種の畏敬を禁じ得なかつた。そして少くとも夫人の、その意志だけは尊重するのが、この際の道だと思つた。で、弟子の末座から、差出がましく感じて顔を赧めながら、恐る／＼その時かう口を出した。

し、先生からも一番愛せられてゐて、謂はゞ文學上の弟子たちの代表的な相談役だつた。それで夫人も何か計るべきことがあるれば、まづこの人に相談したり、世話を頼んだり、命令したりするのだつた。

「大寺ですか。大寺はお医者さん達の方へ、従いて行つたやうですよ。何か御用ですか。」

と、その時傍にゐた、これは弟子の中でも、一番古くから親しいのを以て任じてゐて、先生の家へも可なり親しく出入してゐた上に、宮内省の役人をしてゐるので、文學者の弟子なぞよりも、ずつと頼みになる世話役を以て、自ら任じてゐる松本氏が、横合から代つて答へた。

「いえ、大寺さんでなくてもいゝんですけどね。」夫人はもう一度皆を見廻しながら、さりげなく言ひ出した。

「今、日出新聞社の寫眞部の方が來ましてね、病床の寫眞を撮らして呉れと云ふんですが、どうしませうかと思つて。——」

「病床の寫眞ですつて。まだそれぢやあ新聞社の方では、こんなに悪いとは知らないんですよ。今寫眞を撮らうなんて、そんなことは許せませんよ。」

松本氏はすぐさう反對した。

「奥さん。それやあ勿論おやめになつた方がいゝでせう。あの意識のはつきりしてゐる先生に、今そんな寫眞を撮ることが知れたら、急に何とか不快に思つて、病状が昂進しないとも限りませんからね。」

米田氏もすぐ此方から云ひ出した。

「だが寫眞班なんて、實に亂暴だなあ。今先生が生死の大切の瀬戸際だといふのに、寫眞を撮つて行

「解らないやうには撮れないんでせうか。」
 「マグネシウムをどかんとやらなくちやならないんでせう。あれをやられちやあどんな病人だつて驚いて了ひますよ。」

黒田が、それにつれて、かう云ひ添へた。

「マグネシウムを焚かずに、そつと撮れるかどうか、寫眞部の人に聞いてみたらどうでせう。」
 小野は夫人へといふよりも、寧ろ大寺氏の方へ向つて、かう提言して見た。

「さうだね。それなら差支へなさうだね。——ちやあ一つ聞いて見ませう。」
 それで大寺氏もやうやくさう承知した。

聞いて見ると、まだ閃光粉を焚かなくても、少し長く時間をかければ、そつと撮れるといふことに定つた。小野は何よりも自分の提言が容れられて、夫人に存在を認められたらしいのが、ひそかに嬉しい氣がした。

その時、小野よりも遅れて来た原田が、まだ夫人に挨拶をしてゐなかつたと見えて、隙を見て進み出た。そして夫人の前へ頭を下げた。詫言を云つた。

「奥さん。此度は飛んだ事になりました。……些とも知らなかつたものですから、早くからお手傳ひに上らないでゐて、失禮致しました。」

小野もそれを見ると、自分も改めて挨拶すべき時だと思つた。それで原田の後から、同じやうに進み出て、そして原田の挨拶が済むと、頼むやうに彼に云つた。

「原田君。僕、奥さんに初めてなんだが。……」

「さうかい。ちやあ、——奥さん。是が小野君です。」と原田はすぐ夫人に紹介して呉れた。

「此度は大變な事になりました。……」

小野はさう曖昧に言ひながら、改めて叮嚀に頭を下げた。

「あゝ、貴方が小野さんですか。」と、夫人も改めて、小野の顔を見守つたが、ちらと微笑を浮べて更に云ひ出した。「貴方ですね。この間先生の處へ吞氣な手紙を寄越したのは。」

「さうです。」小野は思はず赤くなつた。「こんなにお悪いとは、少しも存じませんでしたので、ついあんな吞氣な手紙を差上げたりして、ほんとに濟みませんでした。」

それは五六日前に、病床にゐる先生を慰めようと思つて、自分たちが先生に會へぬ淋しさや、日々新聞に出る先生の小説「明暗」に對する感想や、自分たちの近況などを、幾らか諧謔的な輕さで通信したものだつた。

「あれを大寺さんに見せましたらね、大寺さんが此奴こんな吞氣なことを云つてゐるから、一つ嚇かしてやりませうよつて、御返事を私の名で上げましたけれど、驚きはしませんでしたか。」
 夫人は更にかう云つた。

「驚きましたが、併しこんなにお悪いとは、まだ夢にも思つてゐませんでした。」

小野は詫言を云つた。が、それでも夫人に、自分の存在を認められてゐたことが、更に嬉しいやうな得意なやうな氣だつた。

「奥さん。」原田がその時傍から云ひ出した。「先生の御様子も、そつと拜見できないでせうか。」

「あゝ、さうでしたね。貴方は先刻の告別の時には、まだ來てゐなかつたわね。小野さん、さうでせう。——ちやあそつと書齋へ行つて見ていらつしやい。多分まだ、睡りから覺めないでせうから、そつとなら差支へありますよ。」

その夫人の許しの言葉に、小野は原田と一緒に、座を立つて病室の書齋の方に行かうと廊下に出た。するとその時だつた。その縁側の端の、手水鉢などの置いてある處へ一人の若い女の人が、斜に上半身を曲げて、病室の方から持つて来たのであらう、手に持つてゐる白いエナメル塗りの洗面器から、湯をそこに滾してゐるのが、ふいと小野の眼に入つた。年は十八九位であらう。さう眼の覺める程美しいとか綺麗だとかいふ程ではないが、何となく清々しい、しつとりと整つた十人並の顔で、顔色も皮膚もさう冴えてゐないが、塗つたといふ程には、白粉も付けてゐないらしかつた。そして心做しか眼の下が、涙で擦り赤めでもしたらしく、陰影を帯びてゐるやうに濕つて見えた。そして極く普通の束髪に、何の飾りも見當らないし、又その着てゐる衣物といつても、平常の通學着でもあるらしく、褐色絛仙の錢型か龜甲形の飛白で、赤い花模様メリンスの帯を、幾らか胸高に締めてゐるきり、それと兩袂の八ツ口だけが、赤く仄かにときめいてゐるきりだつた。——何處にも取立て、眼を敬てるやうな處はなかつた。が、全體のそのしつとりした姿に、清淨な質素な處女の美が浮き立たないで現はれてゐた。

彼女は洗面器の湯水を、激しい音を立てぬやうに靜かに、少しづつ傾け滾してゐた。器から落ちる湯は、彼女の手のあたりに、微かな湯氣を立たして、さう太くない線を引きながら、美しく下に碎けてゐた。

小野はそれを見た瞬間、すぐこれは先生の家の、一番上のお嬢さんだなどと思つた。先生にお嬢さんのあることだけは、木曜の面會日に少し早く行つたりすると、その隣室にあるピアノの音が、書齋まで響いて來たりするので、陰ながら知つてだけゐた。そしてどんな人だらうとは、ひそかに想像を廻らさぬでもなかつた。併し、今先生の病顔を見舞ひに行く氣持に、さう餘裕もなかつたので、そしてその人には別に氣にも止めずに、原田の後から従いて行つた。前に立つた原田は、その傍を通りぬける時、幾らか親しきみを見せて、「御免なさい。」と挨拶して、その後を通り過ぎた。その令嬢は湯を滾しながら、無言で少し身を動かして、わづかに會釋を返しただけだつた。大人しい、淑かな人だなど。たゞそれだけ小野は思つた。そして原田の後から輕く身を屈めただけで、彼も亦その後を通り過ぎた。その人も、小野を別に氣に止めはしなからしく見えた。

二人は先生の寢てゐる、書齋の前に立つて、その細長い硝子窓から窓帷の透間を通して、そつと内部を窺つた。外ながらでも、先生の病顔が拜されれば、それで満足して戻らうと思つてゐた二人はその薄暗い病室の中を、先生に決して覺られないやうに、瞳を凝らして窺つた。それは小野には恰も「神聖な偷み見」だと思はれた。

すると中にゐる一人の醫員が、入つても大丈夫だと思つたのか何と思つたのか知らないが、手眞似をして招いて呉れた。それで二人はやつと許された思ひで、その書齋のドアの、音を立てぬやうにガ―ゼを捲いた把手を、そつと廻して中へ入つた。勿論先生は何も知らずに寢てゐた。それで二人はなほ、遠く先生の枕上の方に坐つて、怖々病床の方を覗き込んでゐると、今度は病體をさすつてゐた看護婦が、極めて小さい聲で、「此方へいらつしやい。」と言つて自分の横の席を顔で指し示して呉れた。小野はさうまでして頂かなくてもといふ氣と、又その聲や動作で、ふと先生を醒ましはしまいかといふ怖れで、少し遠く巡してゐたが、二人眼を見合せた後、思ひ切つてその近くへ行つて、先生の眠つてゐる顔に面した方の、寢床の左側に描つて端坐した。そして改めてその病顔を見守つた。室内は薄暗かつた。もう夕方に近い外の明りは、樺色の窓帷に遮られて、透間から僅かに蒼白い光を洩らしてゐるきりだつた。そしてもう來てゐる電燈にも、黒い布が陰鬱に被はれてあつて、乏しい

その夫人の許しの言葉に、小野は原田と一緒に、座を立つて病室の書齋の方に行かうと廊下に出た。するとその時だつた。その縁側の端の、手水鉢などの置いてある處へ一人の若い女の人が、斜に上半身を曲げて、病室の方から持つて来たのであらう、手に持つてゐる白いエナメル塗りの洗面器から、湯をそこに滾してゐるのが、ふいと小野の眼に入つた。年は十八九位であらう。さう眼の覺める程美しいとか綺麗だとかいふ程ではないが、何となく清々しい、しつとりと整つた十人並の顔で、顔色も皮膚もさう冴えてゐないが、塗つたといふ程には、白粉も付けてゐないらしかつた。そして心做しか眼の下が、涙で擦り赤めでもしたらしく、陰影を帯びてゐるやうに濕つて見えた。そして極く普通の束髪に、何の飾りも見當らないし、又その着てゐる衣物といつても、平常の通學着でもあるらしく、褐色絛仙の錢型か龜甲形の飛白で、赤い花模様メリンスの帯を、幾らか胸高に締めてゐるきり、それと兩袂の八ツ口だけが、赤く仄かにときめいてゐるきりだつた。——何處にも取立て、眼を敬てるやうな處はなかつた。が、全體のそのしつとりした姿に、清淨な質素な處女の美が浮き立たないで現はれてゐた。

彼女は洗面器の湯水を、激しい音を立てぬやうに靜かに、少しづつ傾け滾してゐた。器から落ちる湯は、彼女の手のあたりに、微かな湯氣を立たして、さう太くない線を引きながら、美しく下に碎けてゐた。

小野はそれを見た瞬間、すぐこれは先生の家の、一番上のお嬢さんだなどと思つた。先生にお嬢さんのあることだけは、木曜の面會日に少し早く行つたりすると、その隣室にあるピアノの音が、書齋まで響いて來たりするので、陰ながら知つてだけゐた。そしてどんな人だらうとは、ひそかに想像を廻らさぬでもなかつた。併し、今先生の病顔を見舞ひに行く氣持に、さう餘裕もなかつたので、そしてその人には別に氣にも止めずに、原田の後から従いて行つた。前に立つた原田は、その傍を通りぬける時、幾らか親しきみを見せて、「御免なさい。」と挨拶して、その後を通り過ぎた。その令嬢は湯を滾しながら、無言で少し身を動かして、わづかに會釋を返しただけだつた。大人しい、淑かな人だなど。たゞそれだけ小野は思つた。そして原田の後から輕く身を屈めただけで、彼も亦その後を通り過ぎた。その人も、小野を別に氣に止めはしなからしく見えた。

二人は先生の寢てゐる、書齋の前に立つて、その細長い硝子窓から窓帷の透間を通して、そつと内部を窺つた。外ながらでも、先生の病顔が拜されれば、それで満足して戻らうと思つてゐた二人はその薄暗い病室の中を、先生に決して覺られないやうに、瞳を凝らして窺つた。それは小野には恰も「神聖な偷み見」だと思はれた。

すると中にゐる一人の醫員が、入つても大丈夫だと思つたのか何と思つたのか知らないが、手眞似をして招いて呉れた。それで二人はやつと許された思ひで、その書齋のドアの、音を立てぬやうにガ―ゼを捲いた把手を、そつと廻して中へ入つた。勿論先生は何も知らずに寢てゐた。それで二人はなほ、遠く先生の枕上の方に坐つて、怖々病床の方を覗き込んでゐると、今度は病體をさすつてゐた看護婦が、極めて小さい聲で、「此方へいらつしやい。」と言つて自分の横の席を顔で指し示して呉れた。小野はさうまでして頂かなくてもといふ氣と、又その聲や動作で、ふと先生を醒ましはしまいかといふ怖れで、少し遠く巡してゐたが、二人眼を見合せた後、思ひ切つてその近くへ行つて、先生の眠つてゐる顔に面した方の、寢床の左側に描つて端坐した。そして改めてその病顔を見守つた。室内は薄暗かつた。もう夕方に近い外の明りは、樺色の窓帷に遮られて、透間から僅かに蒼白い光を洩らしてゐるきりだつた。そしてもう來てゐる電燈にも、黒い布が陰鬱に被はれてあつて、乏しい

拵へてあつた炬燵の中へ足を投げ入れ、小々身體を一閑張りの机に凭せかけて、ひとりで一生懸命に勳章の繪を畫いてゐた。が、皆の入つて来るのを見ると顔を上げて、

「いやア、恐ろしく澤山やつて来やがつたナア。」と悪口を浴びせた。そして人見知りをしない快活さで、皆の顔をじろく見廻した。

「いやア。新太郎ちゃん一人かい。淋しいだらうと思つて来て上げたんだよ。だからその炬燵に入れて呉れ給へよ。」

先に立つた米田氏が、親愛の心を以てかりぶつた。

「あゝ、いゝよ。けれど、僕の邪魔をしちゃあ厭だよ。」

少年はかう云つて、再び今まで書いてゐた、金鷄勳章の輪廓を、一生懸命になぞり出した。それは可なりうまく描かれてあつた。

皆は炬燵の廻りに集まつて、この少年を相手にいろいろな事を調戲ひ半分訊き出した。

「新太郎ちゃん。みんな他の人たちはどこにゐるの。」

「さつと以前から、先生の家に出入して、子供たちとも深い馴染の原田が、心安だてにまづそんな事を訊いた。

「みんなか、姉さんたちは淳二ちゃんと一緒に、みんな向うの母屋にゐるんだらう。僕は先刻から一人で此處にゐるんだよ。」

「さうかい。新太郎ちゃんは偉いね。それで淋しくなかつたかい。」

「淋しいもんか。」

「ほう。さうかい。ぢやあその御褒美に、眞實の金鷄勳章を上げようか。」

光りが赤ちやけたやうに落ちてゐた。その中でたゞ病床の毛布だけが、白く軟かに仄めいてゐた。見ると先生の顔は、その白い毛布の端から、なぜか座布團を二つに折つた枕の上は、光線の加減でてらく光つて赤みをさへ帯びながら、靜かに息をついてゐた。兩頬には、病中で剃る間もなかつたと見えて、嘗て見たことのない疎髯が、もぢやくと光つて生えてゐた。しかもその銀色の交つた髯の爲に、先生の顔は云ひやうのない聖さと嚴かさと尊さを増してゐた。二人はそれを見て、恭しく禮拜するやうに首を垂れた。そして二分時にして退出した。

書齋を出ると、曇つた薄ら寒い夕空に、先生が愛植してゐた芭蕉が廣葉の處々裂けたあたりを黄ばまして、婆娑と影を廊下に落してゐた。そしてその中の一二葉は、斜に折れて折口を露に示してゐた。小野はその芭蕉を見上げ、先生の病を思つて、黯然として元の部屋へ戻つた。

もう廊下には、お嬢さんの姿も見えなかつた。

二

夕暮近くなると、先生の危篤を傳へられた、親戚や知己の人々を初め、先生の關係してゐる新聞社の人々も、急を知つて集まつて來たりしたので、其處の茶の間は可なり混雑して來た。それで用のない門下の人たちは、米田氏を初め黒田や原田や小野や、其他の人々を一團として、門の傍にある齋室の方へ座を移された。其處は八疊と六疊の獨立した家屋で、もとは門番でも住むために作つたのが、今は先生の子供たちの勉強部屋に宛てられてゐる處だつた。

皆打連れて離室へ行つて見ると、其處の小さな六疊の部屋には、先生の長男で今年十一歳になる新太郎少年が、曉星小學の金モール章のついた、可愛い二重になつた詰め襟の洋服を着たまゝ、其處に

「嘘うつけ！ それよりか鉛のでいゝから、ほんとに持つて来いよ。嘘うつくと承知しないぞ。みんなお父さんに叱らしてやるから。」

「これは參つた。ちやあ嘘をつかずに、鉛のをきつと持つて来て上げようね。お父さまがお癒りになつたら、すぐね。」

「ちやあ、きつと持つて来てくれるね。」

「あゝ上げるとも。きつと。——だが新太郎ちゃん、先刻お父さんは君に、何と云つたい。何にも云はなかつたかい。」

午前の永訣をしいに皆が入る前、急を聞いて曉星小學から歸つて来た新太郎、淳二の二少年は、——共に十一歳と十歳の年子で、上に三人の姉を持つ、先生の末に出来た男子だつたが、——歸つて来るや否や父の枕許へ遠慮もなく、どかりと膝を揃へて坐つた。すると先生はその動搖が枕に響いたのであらう、殆ど半ば昏睡してゐたやうな眼を開いて、枕許なる二愛兒を見上げ、何とも云へぬ靜かな微笑を、にやりと洩らされたとの事だつた。その感想を、米田氏は今冗談半分に聞かうとしてゐるのでつた。

すると新太郎少年は、即座に憚りもなく答へた。

「おやぢかい。おやぢは汚い顔をして寝てゐたよ。何處の爺くたが寝てゐるのかと思つた。」

此の少年の露悪家は、この危篤な際を少しも知らずに、平氣で辛辣に自分の父の瘦顔を批評した。この無邪氣なる悪口兒は、前にも往來で通りすがりの父に向つて、「やい、あばた面！」と呼んで、さすがの先生を苦笑させた話は、門弟の中では可なり有名な事實だつた。しかも、先生の主義で、伸びびと殆ど自由に育てられた。この愛すべき都會の自然兒は、今その清透な大きい眼を上げて、この

生涯の一大事を、かくの如く無感傷に看過した。彼はたゞ衰へて面變りのした汚い父の顔を見た。そしてまだその顔の背後に、恐ろしい影を作つてゐる死をまるで、見付けもしなかつたのだ。……小野はその無邪氣な悲劇に、何とも云へず心を動かされて、涙ぐまない譯にはいかなかつた。が、新太郎少年は飽く迄平氣で、金鵝勳章の仕上げに、たゞ急がしく鉛筆を動かすのみだつた。

さうかうしてゐるところへ下宿で別れて来た杉浦が、小野を尋ねて其處へ来た。彼は皆で出している、同人雜誌の用事や、その他の事を済まして、遅いながら心配してやつて来たのだつた。柳井や小野たちより、少し親しくない彼は、幾らか遠慮しながらも、小野を訪ねて様子を見に来たのだつた。小野は離室から出て、其處のもう薄闇の迫つた門の傍で、杉浦と顔を合せた。杉浦はもう一つ別な用事を持つてゐた。それは彼は彼は見舞ひ旁々、新聞社に行つてゐる同じく彼らの友人の、池田から頼まれて先生の病狀を明日の新聞に報道するために、聞いて来てくれと依頼されたとの事だつた。それで小野は知つてゐるだけの事を、立話して杉浦に聞かせた。すると杉浦はその話を聞くと、すぐ待つてゐる池田に知らしてやらなければならぬといふので、その儘歸つて行つた。もう家の中はごたごたしてゐて、先生の家の人などに會つて、見舞ひを述べる餘裕もない時ではあるし、さう親しいといふのでもない一介の弟子のその際の面會などは遠慮すべき時でもあつたので、小野も強ひて留めはしなかつた。そして池田に知らせて了つたら、すぐ歸つて来いと云つて別れた。勿論その間に先生が急に死なうなどゝは、二人とも思つてはゐなかつた。

小野が杉浦と別れて、又離室へ入つて行つた時、新太郎少年はもう金鵝勳章を書き上げて了つたと見えて、今度はその電話機の傍にかけてある、——電話機は母屋にあつたのを、病室に近く響くといふのでわざと離室へ移されてあつたのだが、——心覺えを記すための黒板の前に立つて、何か白墨

で悪戯書をしようとしてゐるところだつた。小野が入つて行くと、少年は急に背後を振り向いて、そして云つた。

「おい君。君、兜の繪が描けるぞ。」

「描けるとも。」小野は笑つた。「君つ位の時、僕らは加藤清正の繪ばかり描いてゐたんだもの。」

「加藤清正？ 加藤清正のなら、烏帽子ぢやないか。あんなぢやないんだよ。義經のやうなんだよ。」

「描けるとも。九郎判官義經のでも、八幡太郎義家のでも。」

小野は昔の自分たちが描いた、古風な武者繪を悲しく思ひ出しながら、この少年を出來るだけ慰めるために、そんな風に應待しなければならなかつた。

「よし。ぢやあ描きつ競をしようか。」

「しよう。君になんぞ敗けやしないよ。」

「赤恥かくな。さあ来い。」

「大丈夫。」

小野は笑つて、新太郎少年と並んで、其處の黒板の前に立つた。

二人は互に兜の繪を描き始めた。小野も古い記憶を喚び起しながら、眞面目に兜の鉞形から、八幡座の形などを丹念に輪廓を取つて行つた。と、新太郎少年も、敗けぬ氣で描き始めたが、そつと小野の方を偷み見て、もとより少年の單純な頭腦と、描き馴れない手とは、小野のに及ぶべくもないのを知つたらしかつた。彼はそつと小野の繪を窺つては、自分の兜に補正を始め出した。初め少年は鉞形の尖が複雑に開いてゐない、半月形の單純なものを描いてゐたが、小野のをそつと見ると、慌て

て先を太く開かして、その中央の凹所へ、小野のを眞似て小さな環状の穴を描き加へてゐた。少年は熱心だつた。そして何もかも忘れてゐる如く見えた。

その時、醫師たちの言葉でもあつたのか、或ひは家の人の念のための命令か、女中が母屋の方からやつて来て、すぐ二人の傍の、電話をかけた。

「もし〜。あの××様でございますか。(それは先生の家の親類か縁者らしかつた。)……あの、旦那様が、もうどうしても駄目らしいでございますから、すぐにお出で下さいまし。……はい、もうたゞお最期を待つだけなんでございますから。……」

かういふ意味の女中の言葉は、何の遠慮もなく、兜の鉞形を補つてゐる新太郎少年の耳に入つた。と、少年は不意に白墨の手を止めて、小野の方を見返つた。

「お父さんはほんとに死ぬの。」

かう云つて見上げた少年の眼には、先刻父の病顔を汚いと評した、あの犀利な冷観はなかつた。そしてそれは眞實の危憂と悲哀とに満ちてゐた。小野はこの少年を、抱きしめて慰めてやりたい位に感じた。そして少しく狼狽して云ひくゑめた。

「いえ、大丈夫ですよ。まだ〜死にやしませんよ。あれはたゞ念のために、お悪くなる時のためを思つて、人にお知らせするだけなんですよ。」

すると無邪氣な少年の心は、すぐ慰められたともなく、兜の繪の方へ移つた。

「これ何？」

少年は小野のを眞似て、つけ加へた鉞形の尖の中央部にある、小さな環を指して聞いた。彼はそれが何だか知らずに、たゞ小野のにあるから、描き加へたらしかつた。

ふ数字を見比べながら、敢てそれを承知せざるを得なかつた。

二人は歸つて行つた。が、それと入れ違ひに、湘南の方に居を持つてゐる、矢張り先輩の弟子の矢部、辻本などといふ、若い哲學者たちが到着した。

その間に、可なり丹念な時間を費して、新太郎少年と小野との兜は打紐まですつかり出来上つた。「どうだい。僕の方がうまいだらう。」

少年は小野が、米田氏や黒田などと、いろ／＼な話をしてゐる間に、すつかり小野の描いた繪を盗んで了つて、出来上るなりにかう云ひ誇りながら、少し黒板を離れて見比べた。

「うむ。これや新太郎君の方が、少しうまく出来たかな。なか／＼うまい！」

小野はさう云つて、微笑を含んで少年を顧みた。と、その時だつた。母屋の方から、急に慌しい下駄音がして、女中が飛び込んで来た。

「新太郎さま。早くおいで遊ばせ。お父さまが大變でございます。……」

かう云つて女中は、吃驚してゐる新太郎少年を、捕へるやうに伴れて行かうとした。炬燵の方にゐた連中も、それを聞くと皆一時に立上つた。そして新太郎と一緒に、慌て、母屋の方へ駆け付けた。

小野は米田氏と黒田に頼まれたので、一人電話機の前へ残つて、わく／＼しながら把手を廻した。

交換手はなか／＼出て来なかつた。彼は叱りつけるやうな激しい聲で、また泣くやうな頼み聲で、やつと米田氏の取次の酒屋へ急を知らしてくるやうに報じた。それから更に黒田の下宿へ、……彼は気が気でなかつた。そしてやつとそれも通じると、黒田はまだ下宿へ、戻りついでゐなかつた。で、歸つたらすぐ又来るやうにと、彼の狼狽を察しながら、下宿の人に慌しく言傳を頼んだ。かうしてやうやく後から、一人急いで離室を出ようとする、そこには彼の下駄はなくて、どう誰が間違つたも

「それかい。」小野は涙ぐましく吻として、「それはね、その兜の鍛形つていふ此處の形をよく見せる飾りなんですよ。だから大将の兜には、きつと是があるんです。そして又頭の方から切りつけられた時、刀を滑らないやうに受けとめる役にも立つんでせう。」

小野もよく分らないので、そんな事を答へる外なかつた。

その時隣の間の炬燵に當つて、雑談に耽つてゐた米田氏は、昨夜來の睡眠不足を休めたいのに、まだ新年號の原稿を書き終へないのを思ひ出して、家がすぐ其處の近いのをたのみに、急に一時歸ると云ひ出した。先生があれから、すつと小康を持ちつづけて、まだ同じやうに持ち堪へてゐるので、それがすぐ急に變じようとは、殆ど誰も思つてゐなかつた。この儘すつと持ち續けて、癒つて了ふか、悪くなつてもすぐには亡くなるやうな事はあるまい。と、誰もがさう信じてゐたので、それを留める者もなかつた。却つて先生が癒ると、飽く迄も信じて、それをまだ力説して止まない黒田が、これも疲れてゐるので一とまづ自分の下宿へ歸らうと同じ出した。彼の下宿は小野と同じく本郷に在るので萬一の場合があつても、可なり遠くて間合はない恐れがあるに拘らず、先生の小康に飽く迄信賴し切つた彼は、若し幾らか状態が變つたら、すぐ電話をかけてくれるやうにと、小野に頼んで歸る事にした。米田氏もそれより先に、急變があつたら近所の酒屋へ、電話で知らしてくれるやうにと、黒板の前に立つてゐる小野に呉々も頼んで行つた。

「若しもの事があつたら、君どうか頼むから、第一に僕ん所の取次の酒屋へ、電話をかけてくれ給へ。一番先に頼むよ。第一にだよ。」

米田氏はかう念を押して、小野の描きかけた兜の繪の上部へ、念のために白墨でその電話番號を、はつきり書きつけた。小野は自分の兜の繪と、恰もそれに附せられた番號のやうな、番町……番とい

人（じん）の手から水筆（すいひつ）を受取（うけと）つて、改めて先生の最期（さいご）の泪（なみだ）をちつと見た。

その顔（かほ）は、先刻（さきと）見たのとは、もうすつかり違（ちが）つてゐた。顔色（かほいろ）はすつかり青（あ）く、妙な光澤（くわさつ）を帯（た）びてゐて、眼（まなこ）は大きく見開（みひら）かれてゐた。そしてその瞳（ひとみ）は、少しも動（うご）かずには黒（くろ）く澱（い）んだまゝ、凝視（ねいし）するともなく、たゞ茫（まう）と前方（ぜんぱう）を見据（みま）ゑてゐた。それは恰（さか）も眼前（がんぜん）にある、小野（おの）の顔（かほ）やその他の人々（ひとびと）の存在（そんざい）を通（とほ）り越（こ）して、杳（やう）か永遠（えいゑん）なる何物（なにもの）かを見凝（みこ）めてゐるのだつた。

小野（おの）は筆（ひつ）で血（ち）の氣（け）のない、土蠟（どろう）色の先生（せんせい）の唇（くちびる）を撫（な）でた。先生（せんせい）はその口（くち）を通して、時々（ときどき）引（ひ）釣（ひき）るやうな息（いき）使（つか）ひをしてゐた。小野（おの）は水筆（すいひつ）を捧（た）げ終（お）ると、夫人（ふじん）にそれを渡（わた）し返（かへ）さうとした。併（ひ）しちつと何かと堪（た）へて、正面（しょうめん）の空間（くうかん）を見やつてゐた夫人（ふじん）は、その筆（ひつ）を受取（うけと）らうともしなかつた。小野（おの）は静（しず）かなる狼狽（ろうたい）を感じ（かん）じた。そして改めて注意（ちゅうい）を促（うなが）すやうに、夫人（ふじん）の手（て）へその筆（ひつ）を、恭（こう）しく載（の）せて、そして退（ひ）いた。

小野（おの）の後（のち）から、更に先生（せんせい）の同輩（どうぱい）の知友（ちゆうゆう）たちや、なほ知名（ちかめい）な人々（ひとびと）が先生（せんせい）に最期（さいご）の水（みづ）を供（こう）した。小野（おの）はそれを見（み）ると、この凡（およ）ての蔽（おほ）ふべき悲（かな）しみの中（なか）にも、自分（おのれ）の人（ひと）に先（ま）んじた無作法（むさうぱふ）を、心（こゝろ）から悔（く）いて腋（わき）の下（した）に汗（あせ）をかいた。が、場合（ばあひ）が場合（ばあひ）なので、と、かう強（こゝろ）ひて自ら慰（なぐさ）めた。が、彼の悲（かな）哀（あは）れはその時（とき）から妙な形（かたち）で突き濁（つ）されたやうな氣（け）がしてならなかつた。

小野（おの）の電話（でんわ）をかけた米田（やねだ）氏が、遅（おそ）れて、併（ひ）し息（いき）を引取（ひきと）らない中に、急（いそ）いで到着（とちやく）した。そして人々（ひとびと）の最後に、水筆（すいひつ）を取（と）つて先生（せんせい）に捧（た）げた。

今はたゞ、皆（みな）黙（もく）つ、先生（せんせい）の死（し）を見凝（みこ）めてゐるばかりだつた。黒（くろ）く押し黙（もく）つた人垣（ひとがき）の中で、先生（せんせい）は白布（しろふ）に包（か）まれないながら、時々（ときどき）頤（あご）を引（ひ）きつけるやうにして、苦（くる）しい呼吸（こそ）をゆるく刻（く）んでゐた。時々（ときどき）忘（わす）れたやうに呼吸（こそ）が止（と）まる。そして又（また）思（おも）ひ出（だ）したやうに、ぎくりと喉（のど）を動（うご）かし始める。その喉（のど）の中で、微（か）かに二三度（さんさん）痰（たん）の鳴（な）る音（ね）がした。そして呼吸（こそ）は、だん／＼數（かず）が少（すく）く、忘（わす）れられたやうに静（しず）かになつて行（い）つ

のか、却（か）つて新太郎（しんたろう）少年（せうねん）の小さな駒下駄（こまげだ）が、謎（めい）のやうにぼつりと置き残（のこ）されてあつた。小野（おの）は考（かん）ふる暇（ひま）もなく、その小（こ）さい下駄（げだ）を爪（つめ）先に引（ひ）つかけると、轉（ころ）びさうに先（ま）走（まわ）りに走（は）つて、母屋（ははや）の方（かた）へ駆（か）けつけた。

小野（おの）がかうして急（いそ）いで、後（のち）から病室（びやうしつ）の中（なか）へ入（はい）つて行（い）つた時（とき）、まづ彼の目（め）を打（う）つたものは、病床（びやうしど）の周圍（しゅうい）に、黙（もく）つてしんと見守（みま）つてゐる、黒（くろ）い人々（ひとびと）の群（ぐん）であつた。その人（ひと）たちは前（まへ）の方は坐（ま）り後（のち）の方は立（た）つて重（おも）なり合（あ）ひながらも靜（しず）肅（じゆく）に、中央（ちゆうおう）の一點（いってん）をちつと見凝（みこ）めてゐた。そしてその人々（ひとびと）が心痛（こころい）の眼（まなこ）を注（つ）いでゐる中心（しんしん）には、先生（せんせい）の死體（したい）が白（しろ）く横（よこ）たはつてゐた。もう電燈（でんとう）の蔽（おほ）ひは取（と）除（ぞ）かれて、光（ひかり）りは鮮（あざ）やかに白いベッドや毛布（けふし）を照（て）らしてゐた。醫師（いし）が四（よ）人（にん）、先生（せんせい）の横（よこ）たはつてゐる左側（ひだりがは）に、呼吸（こそ）の様子（やうす）を緊張（きんかう）して檢（けん）べて見てゐた。先生（せんせい）の右側（みぎがは）には、死（し）んで行（い）く良人（らうにん）の胸（むね）のあたり（あたり）に手（て）を置（お）いて、夫人（ふじん）が端（は）坐（ざ）してゐた。そしてその枕許（まくらご）には、三人（さんにん）の令嬢（れいぢやう）と令息（れいき）二人（ににん）を初（はじ）め、先生（せんせい）の令兄（れいけい）及び親戚（しんせき）の人々（ひとびと）が、取（と）り巻（ま）くやうに坐（ま）つてゐた。獻（けん）款（くわん）の聲（こゑ）がそのあたり（あたり）から洩（も）れた。小野（おの）が入（はい）つて行（い）くと、敏感（びんかん）と好奇（こきう）に満（み）ちた新太郎（しんたろう）少年（せうねん）が、ふと涙（なみだ）に満（み）ちた眼（まなこ）ながら、小野（おの）の方（かた）を見返（かへ）つた。

夫人（ふじん）は何（なに）故（ゆゑ）か死者（しや）の顔（かほ）を見（み）ずに、すつと正面（しょうめん）を見（み）るともなく見凝（みこ）めてゐた。そして今はもう最期（さいご）の先生（せんせい）の唇（くちびる）を濡（ぬ）らすため、一々（いついつ）枕邊（まくらべ）へ寄（よ）つて來（き）る人々（ひとびと）に、末期（まうご）の水筆（すいひつ）を手（て）渡（わた）してゐた。夫人（ふじん）は泣（な）いてはゐなかつた。が、その姿（すがた）が明（あ）かに泣（な）く以上の悲痛（びつう）を表（あらわ）してゐた。

小野（おの）が人々（ひとびと）の後（のち）から、今（いま）息（いき）を引取（ひきと）るばかりの先生（せんせい）を覗（のぞ）き込んだ時（とき）、丁度（ちやうど）先刻（さきと）一緒に先生（せんせい）の病顔（びやうがほ）を拜（ひら）した、あの原田（はらだ）君（くん）が水筆（すいひつ）で唇（くちびる）を濡（ぬ）してゐた。後（のち）から入（はい）つて來（き）た小野（おの）は、原田（はらだ）がさうしてゐるのを見（み）て、もう大抵（たいだい）の人々（ひとびと）が濟（た）んだのだと思（おも）つた。そして自分（おのれ）もさうする資格（しきかく）があると信（しん）じて、我（わが）さつな無（む）遠慮（えんりょ）に吾（われ）を忘（わす）れて了（し）ひ、幾（いく）らか前（まへ）にゐた人々（ひとびと）を押し（おし）のけるやうにして、そつと進（すす）み出（だ）た。そして夫（つと）

た。が、もう消え失せたのかと思ふと暫らく経つて、又僅かに喉のあたりが動いた。周囲の人々は只手を拱ねて、今はだん／＼微かに、緩くなつて行く呼吸を、ぢつと此方も息を吞んで見凝めなければならなかつた。

枕邊に近いお嬢さんたちの間からは、堪へ切れぬ歎歎の聲が、たゞ寂寞を破るきりだつた。一分、二分、かうして時は過ぎて行つた。先生の息は益々微かになり、そして有無の限界が分らなくなつた。が、人々ははまだ、先刻からの状態の連続で、もうそれが最期の呼吸だとは、誰も思はずに見凝めてゐた。が、その時病床の右手に坐つて、ぢつと様子を見てゐた眞島氏が、手で妙な合圖を奥さんにした。小野にはその意味が解らなかつた。と、夫人は先生の額の上に蔽うてあつた白布を眼の處まで下げて、靜かに先生の眼を隠すべく、幾度かそつと撫で下した。それが濟むと眞島氏は、もう一度無言で指圖をした。今度は夫人は先生の口を靜かに閉させ始めた。よく見るといつの間にか先生の呼吸は、天地の寂寞の中に潜み入つて、靜けく消え去つて了つてゐた。

眞島氏は聽診器を取り出した。そして先生の胸にかけた毛布を取り除けて、心臓のある胸部の上にとつとその白い象牙の尖を載せた。そしてぢつとそこから指を放して、靜かに器を放置したまゝ、その中の音に聞入つた。それから更にもう一度少し上の方へ、其聽診器を移して、同じやうに聞入つた。その後からは今度は又傍にゐた矢部氏が同じく聽診器を心臓の上に當て、二人とも端然と暫らく耳を澄ましてゐた。それは醫師の禮法といふよりは、寧ろ宗教上の儀式のやうにさへ思はれた。皆は固唾を吞んで見てゐた。と、もう何の音も聞えなかつたと見えて、やがて聽診器を靜かに撤した眞島氏は、

「お氣の毒でございます。」

と、夫人の前へ頭を下げた。

それを聞くと皆も同時に肅と頭を垂れて、何ものとも知れぬものに禮拜した。

萬事は休したのだ！先生の頭の上には、雪白な布が蔽はれて、もう温顔を見る由もなかつた。見たところで何にならう。先生には息がないのだ。あの理智と温情とに満ちた眼は、もう永久に閉されて光りを失つたのだ。先生は死んだのだ。今、自分の眼の前で死んだのだ。——小野にはそれが夢のやうな、現實として信ぜられないやうな氣がした。が、現實には違ひないのだ。

小野は暫らく呆然として、夫人が、「さあ皆さんどうぞお立ち下さい。」と氣丈な聲で促されても、そこに先生の遺骸を見凝めたまゝ立ち盡してゐた。向うの隅では畫家の須山氏が、泣き崩れて立たうともしなかつた。が、夫人に促されて、涙を拭つてやうやく立上つた。小野もその畫家の純粹な涙を見ると、やうやく熱くなつて來た臉を抑へてそこを立去らねばならなかつた。

戸外はもうすつかり濃い闇だつた。廊下へ出るとその暗い夜の空に、庭の芭蕉は更に陰暗たる悪魔のやうな翹を、しんと四方を蔽ふやうに垂れてゐた。

黒田と杉浦とは、たうとう臨終の間に合はなかつた。鎌倉の柳井もたうとうそれ迄には到着しなかつた。

第四章